

特集 へとまる・とどまる

「とまる」ことからはじまる

―やがて「とどまる」ことから世界認識が広がる―

高橋 和子

軽快なピアノの旋律がとまる

歓声と猛スピードの走りがとまる

一瞬の静寂がホールをつつむ

子どもたちの顔は次の瞬間を待っている

ピアノの音に耳をそばだてている

こぶしを握りしめ肘を曲げて待っている

ピアノがなった 一転して走る 走る

子どもは「走ってとまる」運動が好きだ

音と一緒になぜか大きな声を出して走る

転んで泣きべそをかいてもまた走る

円心からだをあげてカーブを走る

楽しそうに夢中に顔をしかめて走る

風を切って蝶のようにかろやかに走る

なるほど「人間は動物だった」のだ

子どもは「走つてとまる」運動を毎日繰り返しても飽きない。「走る」だけなら駄目かもしれないが、「とまる」ことと一緒になるとおもしろさも倍増するらしい。単調な動きであるのだが動と静との変化に子どもは興味を覚える。とまれば休息にもなる。エネルギーを蓄える。そして「動く」へ備える。子どものからだのリズムは楽しさを繰り返すために、まったく自然に働くものののだ。

「ピアノがとまったら、からだのどこかを床につけてとまろう」という遊びがある。指示は「胸・肩・背中・おしり・おでこ・ほつべた・右の耳・左の膝」などの簡単な身体部位であったり、「踵・土踏まず・うなじ」などのむずかしい呼び名も混じる。見よう見まねも手伝つて「おとがい」がどこなのかもひとりでにわかつてくる。このとき、これが「生きた言語学習の鉄則だ」と実感させられる。われさきに競うので、ときに子どもは間違ふ。左右の

区別がつかなかったり、指示をちゃんと聞いていなかったりしてのことだが、これもいつのまにか修正してしまう。

この遊びは身体部位と身体意識を全身運動でつなげる学習であるが、人の話は集中して聞くべきであるという「生きる力」の基本形をからだで覚えさせてくれる。さらにひとひねりすれば、子どもの世界認識が格段に広がる。「床に耳をついたらどんな音がする?」と聞くと、子どもは「モグラの鳴き声が聞こえる」などと答えたりする。子どもの発想の豊かさに驚かされる。「床は冷たい・ザラザラする」といった気づきを促すこともできる。「床ではなくて、お友だちとからだをくっつけてみようね」と言えば、人とかかわりも無理なく生まれてくる。床や人や草木の感触の違いや、どのくらいの力加減で自分のからだをくっつけたらいいのかも、ひとりですべてに覚える。ここに、遊び「走つてとまる」の意味と学びがある。

それでは、「こんどは、いろいろなポーズをとって、とまれるかな…」と趣向を変えてみよう。走っている途中のままでとまったり、片足をあげたり、ブリッジしたりする。イギリスやアメリカではこのような運動教育が幼少期に活発に行われており、運動学習の基礎を担っている。日本の子どもにもさまざまなからだの使い方を覚えてほしい。その事始めが「走ったり」「とまったり」することだと、私は考えている。猛スピードの走りを急にとめるのには相当な筋力とからだの操作が必要になる。音を立てずにそつととまったり、膝や足首や爪先をうまく使うとき、どうなるか。いろいろな言葉を覚えるように、運動の両極「走る・とまる」を肌身で経験することによって、からだの動きの幅と意味とが広がるのである。

そうこうしているうちに、蛙や兎やお化けになりきって、夢中で変身世界に遊ぶ子どももでてくる。子どもは怖いもの見たさをとくに好む。一つ目小僧

やのつぺらぼうに、表情豊かに声まで添えて変身する。私を怖がらせようと、ポーズのみでは物足らず、すごい形相をして追いかけてきたりもする。

「コワイコワイ」とでも言おうものならば、ボルテージがあがって、ロボットや熊に変身している子どもまでも加わり、その場はお化け屋敷に一変してしまう。辞書を覗けば「とまる」の語義に「ある態度をとる」ためとあつて、原因説にも触れている。

そのとおりであつて、このように自分で工夫しだす態度が芽生えてくると、子どもたちは、きまつて「見て！ 見て！」を連発する。

「ボクこれができるよ、わたしのはこうよ…」と、むずかしいポーズへの挑戦も始まる。「とまる」が工夫を促す。度重なるうちに子どもが世界と出合う「いま・ここ」に「とどまる」時間ものびてくる。

そうなれば工夫が醸成されてきて、ときおり驚嘆するばかりの表現を見せてくれたりする。この際、「とまる」と「とどまる」ことは、子どもが「ひ



思えてくる。ところで、子どものこのような素直な世界認識行動がなぜなのか、いつのまにか失われてしまう。近年では小学校高学年でその兆候が現れたりするのだが、私は困惑を禁じえない。これは、二

## 漢字と日本語

最近の受験ガイドブックのなかには、漢字の書き取りの勉強はするな、と指導するものがあるそうです。努力の割に配点が低いので効率が悪いと言うのです。たしかに大学入試という目的の前には、効率が重要でしょう。しかし、人生、いつもゴールが決

十年余りを子どもとともに表現運動を遊んできての切実な実感である。

(横浜国立大学)

渡辺 純一

まっているわけではありません。目標を見つけることの方がもっと大切かも知れません。ガイドブックの著者が最難関の医学部に合格しながら、もっぱら受験指導に力を入れているのは、手段と目的を取り違えたとは言えないでしょうか？